

第二期 第八十二号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2023.05.10 定有堂書店 発行

本屋でない人生なんて

本屋の守護神と呼ばれて

本屋のない人生なんて

「反哲学」と生成変化し続ける定有堂書店

本を作る側から (2)

汽水のほとりから (26)

本屋の中をぶらぶら歩く

惜 春 賦

鳥取あれこれ その八十一

八代日記 (三十八)

「差異」からはじまる

飛ぶ

眉芸の野望

…… 編集後記

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラマリア



本屋でない人生なんて

奈良 敏行

(定有堂 店主)

定有堂書店は二〇二三年三月三一日と四月一八日との二段階に分けて閉店した。店内レジ横に告知のチラシを一枚出しただけだった。掲示と同時に来店で目に留めた詩人の白井明大さんがSNSで簡潔に報じたのが広く伝わった。第一報だったかもしれない。数日して懇意にしている齋藤明彦さんが長文の説明にチラシ画像を付けてSNSで告知した。これで図書館・出版関係の方々に伝わった。この二つで縁のある方々にほほ伝わったのが驚きだった。以降絶え間のない慰問来訪が続いた。

そんな動きの中遅ればせにチラシの上部に文言を加えた。「身の丈に完結している世界を外部が解釈すると別のものになる」。これは十年來定有堂の出版物『伝えたいこと』のポップに記している言葉だ。閉店という決断に「なぜ」「どうして」と問われるのに答えきれなくて、戸惑ううちになんだここに答えが書いてあったと気づき、この言葉に

助けてもらった。

たくさんの励ましと告知を目にしたが、次の2つが心に
しみた。

《元書店員だった友人は言います。(後継者の立たない理由)「あれだけメッセーj性の強いお店を作ると、それはもう個性さえも通り越していて、おそらく誰もがあの枠に入ることは不可能というか、そもそも誰かにーと考えることが不毛です》(「地方・小出版流通センター通信」三月十五日川上賢一さん)

「メッセーj性の強い」って何だろう。考え続けている。次の記事もそのことを解き明かすもののように思えた。

《特徴のひとつは、奈良さんが「人文書でもうお友だち」というキャッチフレーズを掲げながら「ミニコミ」をつくるような気持ちで本屋をつくってきたことにある。書店をミニコミに見立て、お客と書店を越える「物語」を一緒につくっていかうと考えたのである。物理的に限界のある書店という空間を、ミニコミ的な場として解放することで、空間的な制約を突破しようとしたのだ》(「web 論座」四月二十日長岡義幸さん)

閉店チラシの末尾には、「読む会」などの定有堂教室各講座は四月以降も継続します、ミニコミ『音信不通』も同様ですという意味のことが書かれている。

『音信不通』七九号(二月号)に「沫雪に寄せて」というタイトルで書いているが、次の引用で始まっている。

《淡雪の中に頭(た)ちたる三千世界またその中に沫雪ぞ降る》(良寛)

淡雪も沫雪も「あわゆき」と読む。沫雪は淡雪の中に入れ子構造的に立ち現れている。多くの方が閉店の心境がよく窺われると語っているが、じつは記した一月にはまだ閉店の考えは固まっていなかった。現実の「書店」が「淡雪」であり「物語」が「沫雪」である。自分では数年前から「物語」が「書店」を追い越していくという思いにとらわれていた。「沫雪」が「淡雪」を追い越す。「読書」が「本屋」を追い越していく。

昨年はずっとドウルーズについて読んできた。ここに「沫雪」を感じたからだ。同一性と差異、現働姓と潜在性、規範と逸脱、モル状と分子状。これは「淡雪と沫雪」の光景だったかもしれない。昨年十月に定有堂教室「ドウルーズを読む会」を発足させ、今年はその成果を棚に反映しようと意気込んでいた。十年ごとに変化を反復しないと退屈だからだが、変化の糸口が見えてきたところだった。「沫雪」が「淡雪」を追い越すってなんだろう。それは「生成変化」のことだと思えてきた。関係性の組み変わりのことで、組み変わるためには断片化される必要がある。もう一歩前

に進めると思ったが、タオルがリングに投げられドクター
ストップがかかった。

「生成変化」——三年前新型コロナウイルスの始まりの頃に「見過
ぎ世過ぎは草の種」というエッセイを書いた。同じ小さな
本屋の人たちへの励ましのつもりの内容だった。これはい
ま思えば生成変化を肯定的に受け止め何度でも再生しよう
というメッセージだったと気づいた。

定有堂の棚は小さな固まりごとに小さな声を発していた。
固まりの中核に「推し本」があつたり、本は入れ替わるが
同じような本が同じところにまた現れたりと、息づくよう
な秩序が保たれ、本が呼吸をしていた。それも「本のピオ
トープ」の一つの光景だった。淡雪の世界だ。またその中
には、読書会や日頃店頭で交わす会話の中で、連続性をも
つ本の世界や理念の世界もあった。それは主に『音信不通』
の中に狭いが広く、「沫雪」のように展開していた。

四月十九日は日販の方々のお世話になり、数時間ですべ
ての本が棚から消えた。ダンボールに積み込まれトラック
に荷積みされた。長年にわたり築かれた棚の秩序や関係性
が一瞬にして混沌に帰し、モル状から分子状に移行するの
を目の当たりにした。意味つながりでまとまりを作ってい
た本たちが、いわば存在の一義性に立ち返る光景だった。
定有堂での関係性が失われ書物の群れは平滑空間へと去つ

て行った。手伝いに来てくれていた汽水空港さんはどう
思ったのだろう。いまだ聞けてはいない。

ふと三年前の自分がいまの自分を励ましているのに気づ
いた。「見過ぎ世過ぎは草の種」というささやきだ。生成
変化は関係性の組み変わりに過ぎない。

生成変化のど真ん中にいるわたしにノンフィクションラ
イターの三宅玲子さんが『音信不通』に原稿を寄せてくだ
さった。「本屋のない人生なんて」だ。いたずら半分に下
の句として、この「本屋でない人生なんて」を書き付けて
みた。

「生成変化」はつづき、「沫雪」の物語がはじまろうと
している。

2023.04.30

(参考)

『見過ぎ世過ぎは草の種』

『BookstoreAID 特典本』Bookstore AID 基金 2021 所収

三宅玲子 『真夜中の陽だまり——ルポ・夜間保育園』

文藝春秋 2019

三宅玲子 『本屋のない人生なんて』

光文社 今秋刊行予定

本屋の守護神と呼ばれて

石橋 毅史

(作家・出版ジャーナリスト)

『』というテーマで書いてくださいと奈良さんに言われて困惑した。僕をそう呼ぶのは奈良さん唯一人であり、他では全然いわれていないのである。ほめられると図に乗るところはあるものの、謙虚さも人並みに持ちあわせているつもりだ。自分には「デカすぎるキャッチフレーズである」とくらいはわかる。

さあ、どう向き合おう？

定有堂書店は、全国の本屋、本屋志望者、出版関係者、本屋好きが訪れることから「本屋の聖地」と呼ばれた。これも大きな言葉だが、そんなの認めないという人に会ったことはないし、本屋について考えるとき、定有堂を思い浮かべる人が多かったことはたしかである。僕も、普段はこういう言葉が出てくると警戒して使わないのだが、これに限っては自分が抱いてきた感覚に近い。

定有堂が聖地なら、店主は聖者ということになる。守護神とか聖者とか、ほとんど神話の世界じゃないかと苦笑してから、いや待てよ、と思いついた。神話についてなら、

いえることはある。僕の書いてきたものは、ちよつと神話的なのである。

二〇一一年に『「本屋」は死なない』という本でデビューした。その前は出版業界の専門紙で流通、商慣習、出版社や書店の経営について取材していて、この経験を下敷きにしつつ、当時、電子書籍の台頭などで将来性が乏しいといわれた書店業の現場を巡った記録だ。以来、「本屋」書店主、書店員をはじめ本の現場にたずさわる人」を中心に、本回りの話を書いてきた。

たとえば、岩手県の一関市に暮らす元書店員に会った。独自のベストセラーを次つぎと発掘してカリスマ書店員と呼ばれたが、その後リストラで職を失い、当時は親の介護に専念していた。自宅に아가って話を聞いた後、彼が勤めた盛岡市の書店へ行き、かつての部下や経営者に会った。すると彼に追加で訊ねたいことが出てきていったん一関へ戻り、それからまた盛岡へ向かった。

一関と盛岡は百キロほど離れていて、聞いた話を移動の車中で振り返る。それぞれの主張や思いを受けとめ、理解しようとする。この段階では頭の中はぐちゃぐちゃで、書くことの遙か手前にいる。

ところが移動を繰り返すなかで不意に、なんともいえない感慨のわきあがる瞬間があった。岩手の美しい山々、

鬱蒼とした森林の湿気、土の香りと、元書店員の言葉、表情、仕草が、絶妙に調和しているように感じられた。

沖縄の三坪の書店で店主の話を聞いていたときは、二歳の娘を預けている保育園から彼女の携帯電話に連絡がきた。ひどく体調を崩している、熱も高いので迎えに来てほしいといわれたという。

その日はそれまで、わりと暇だった。ところが店じまいの準備をはじめた途端に客がぼつぼつとやって来て、しかも腰を据えて棚を眺めはじめた。すると店主は、立て看板などを片づける作業を中断し、客を急かすこともなく、自分も椅子に座って本に目を落したり、なんの用事もないかのように三十分余りを過ごしたのである。娘のことは気がかりだけど、今日も最後の客を送りだすまでは本屋だという、静かな葛藤とプライド。その日、店主が発したどの言葉より印象的な姿だった。

話を聞きに行った僕、話してくれる本屋、この両者に加えてもうひとつの「何か」が立ち現れたとき、書かずにいられない物語になる。「何か」は、僕や本屋よりずっと大きな存在（岩手の豊かな自然）だったり、僕や本屋にはどうにもできない突発的な出来事（娘の体調不良と来客）だったりする。

振り返ると、そうした人智の及ばない領域のこと、つま

り神話的な力を利用することで書けた話は多い。鳥取でもそういう経験をしたが、定有堂はやや特殊で、店主自身が神話的に語る人だった。インパクトがあって理解しやすい数字や実績の話、苦労話は後ろに下がる。なぜなら聖者だから、と受けとめると腑に落ちる。

さつきは大きな言葉と書いたけれど、守護神も聖者も、じつは小さな言葉なのだろう。誰かにとつての守護神、街のあちこちにいる聖者、それくらいのものでいい。自分の力の及ばぬところを補ってくれる存在で、それは神話として一人ひとりの心の中に生きる。指名されたほうは、黙々と役割を引き受けるだけである。

かなり納得した気分になり、「奈良さんによると、俺は本屋の守護神らしいよ」と妻に言ったら、へ？ と怪訝な顔をされた。やっぱり大きすぎる？ いや、もうこうなったら自分からいい続けてやろう。

『本屋がアジアをつなぐ』 ころから 2019

『本屋な日々 青春篇』 トランスビュー 2018

『口笛を吹きながら本を売る』 晶文社 2015

『まっ直ぐに本を売る』 苦楽堂 2016

『韓国の「街の本屋」の生存探究』 クオン 2022

『「本屋」は死なない』 新潮社 2011

本屋のない人生なんて

三宅 玲子

(ノンフィクションライター)

気がかりを抱えていた。十日が経とうとするが、返事が来ないのだ。相手がたに球はあり、こちらになすすべはない。私は嬰兒殺害遺棄事件の取材をしている。ある裁判を取材した記事に関して、事前に原稿を見せると約束した弁護士から返事を待っていた。

予期せぬ妊娠をした女性が孤立出産し、殺害、そして遺棄に至るまでの一連には、家族関係や発達の問題などが複雑に絡み合う背景がある。そのことに触れずに女性を加罰するだけでは事件の核心はわからない。この問題をうやむやにすることは、産む性を加罰する社会の歪みを放置することにはかならない。歪みの後ろには、長く女性を虐げてきた家父長制が関わっていると私は考えている。

だが、弁護士は、そうした背景を仔細に伝える記事が被告と家族を苦しめることになるかと警戒していた。

弁護士の懸念は理解するものの、臭いものに蓋をするのでは真実が理解されないままではないか。その考えは変わらないが、そうは言っても弁護士の無言の圧を前に心のエネルギーは落ちていた。親の痛みがわかるからだ。

四月のある日、定有堂を訪ねたとき、私はこのように弱っていた。

ぎつしりと並んだ本が語りかけてくる棚に、わずかながら隙間が生じていた。これまでにない数冊分の隙間は、その日が近づいていることを教えた。だがカウンターにはいつものように店主が俯き加減で手を動かしている姿があった。見覚えのある風景は、ああ、鳥取にまた戻ってこれたという安堵を引き出した。

実はコンディションがよくないんです。心を支配されている目下の悩みを店主に打ち明けた。店主はカウンターの横に折りたたみ椅子を出して私をすわらせ、隣で聞く姿勢をとった。それだけでも救われるところへ、弁護士は権力者だからねと、権力のある立場が弱い立場を困らせるのは間違っていると言わんばかりの顔をした。いつもこの人は声の小さい人の側に立ってきたんだったなあと、自分が店主について書いた原稿が頭によぎった。

全国の独立書店を訪ねる取材で初めて訪れた二〇二〇年一月以来、機会を見つけてはこの場所に通い、店主の語る、本屋を営むということについて、耳を傾けた。それは、本屋という生き方を知るひとときだった。その取材をまとめた本は秋に形になろうとしている。

そもそもここには権力の側に立つ本は見当たらない。

どう権力に距離をとるか、どう弱い立場が心を自由に生きるか、といった本を読む人に手渡ししてきた人だ。

何をジャッジするでもなく劳いの言葉をかけられ、生き延びたと思った。

この日、東京から熊本へ向かう道すがら鳥取に回ったのは、定有堂のドウルーズを読む会に参加するためだった。フランスの哲学者ドウルーズの著作を読む会を2ヶ月ごとに開くと、店主に聞いた。事前に読んでいなくてもここでは否定されない。毎月の読む会に加えて新しく始まるというのだ。そしてこの日、一ページも読んでいないというのに、私はドウルーズからも安らぎを得ることになる。

いつものように、進行役の数学者がかいつまんで人物を紹介し、参加者から質問があがり、問う人と答える人の斜めの対話が始まっていく。

すでに固まった概念に対して境界なく捉えるというドウルーズの試みを数学者が語り、思わず耳をそばだてた。嬰兒殺害遺棄事件の加害者と位置づけられる産んだ女性を、本当に加害者なのか、という視点から問い直そうとする取材に対して示唆を与えられたように思った。

二時間ほど経つ頃には、自分の置かれた状況について距離をとってとらえ、肯定的に見る助けを得たと思えた。哲学は悩んだときにも効くのだなと思った。

だが、もしドウルーズの概要を知っていたとしても、心が疲れきっていたら、手に取る気力はなかっただろう。一人ではなく、集まって読む場所があるということが、誰かの心を支えているのだと身に沁みた。この夜、ドウルーズを読む会には十五人ほどが集まっていた。それぞれに心に思うことがあつて参加している。そう思うと、直接言葉を交わさずとも親しい気持ち湧いた。

そのような場所を店主は三十年以上続けてきた。

店主が本屋を「青空」と例えたことがある。生きていれば曇りや雨降りが多い。土砂降りもある。本屋で棚の前に立ち、気がつくとき、さまざまに心が歩き回り、駆け巡り、数冊の本を選ぶ頃には心に青空を取り戻している。そんなとき、ああ、まだ大丈夫だと思える。店主がつくってきた場所は、自分をそれ以上でも以下でもなく受け止め、ときには立て直し、ときにはありのままに生きていく意思を育む手伝いをしてくれた。

定有堂は五日後に閉じた。本屋のない人生なんて、なかでも定有堂を抜きにした人生はもう考えられない。今行けば、久松山の麓に続くアーケード街の一角のシャッターが降りているのだと思うと信じられない気持ちがあるが、不思議と店が心に生き続けているという実感がある。秋に送り出す本を私は『本屋のない人生なんて』と名づけた。

「反哲学」と生成変化し続ける定有堂書店

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授）

（「読む会」選書人）

昨夜四月一八日（火）午後八時頃、定有堂書店は静かに閉店した。一九八〇年一〇月一〇日（金、体育の日）に開業して以来、四二年六ヶ月と八日、日数にして一五五三〇日の店頭販売の歴史に幕が下りたのである。

その二日前の四月一六日（日）、私は就寝前にたまたまラジオを聴いていた。午後一時から五分間のニュース（NHK・R1）が流れている。そろそろ寝ようとスイッチを切ろうとしたとき、普段はほとんど耳にすることのない「ラジオ深夜便」のオープニングテーマが流れ、本の紹介コーナー「本の国から」（第三日曜）が始まった。今回から、三月までの永江朗さんに代わって、東京・荻窪の書店主・書評家の辻山良雄さんに担当が代わるらしい。

聴くつもりはなかったが、辻山さんの冒頭の言葉に驚き、すっかり目が覚めてしまった。三月末をもって閉店する二つの書店のことをお話しします。八重洲ブックセンターと鳥取の定有堂書店です。―

えっ！定有堂書店はあの八重洲ブックセンター（東京へ行くたびに必ず立ち寄った）と同列に扱われるほどのすご

い本屋さんだったのか。三〇年近く、何気なく店頭で本を眺め気軽に「読む会」に参加していた。定有堂書店がなかったら、奈良さんにお会いしていなかったら、私の人生はどんなにつまらないものになっていたか。

思い出話をすればキリがない。哲学オタクらしく定有堂書店について哲学的に考察してみよう。

「反哲学」という概念がある。『岩波 哲学・思想事典』（一九九八年）「反哲学」の項（木田元執筆部分）を乱暴にまとめると、マルクス、ニーチェ、ハイデガー、メルロ・ポンティ、デリダ、フーコーらによる「哲学の拒否」＝「非哲学」＝「反哲学」となる。私なりの表現を交えれば、「形而上学」＝「（イデア的）同一性」＝「神」＝「理性」＝「精神」の哲学を脱構築することによって、ポスト哲学の思考様式を拓こうとする営みである。

木田元（一九二八―二〇一四）といえば、一九七〇年代から精力的にフッサール、ハイデガー、メルロ・ポンティを翻訳・研究した著名な学者である。岩波新書『現象学』（一九七〇）は、当時の「現代」思想を学ぶ若者にとつて、少し大げさかもしれないがバイブルのような存在だった。木田の著作には『哲学と反哲学』（岩波書店、一九九〇年）がある。彼は現象学者であつて、ドゥルーズ＝ガタ

りには言及しない。論理的に考えれば、「同一性の哲学」の終焉後には「差異の哲学」が到来するのがごく自然であろう。「反哲学」Ⅱ「ドゥルーズ哲学」ではないのか。

「話が飛躍しすぎだ」とお叱りの声が聞こえてくる。飛躍ついにて、「反哲学」Ⅱ「差異の哲学」と「存在の一義性」Ⅱ「このものの性（此性）」の関係について考えてみよう。

中世のスコラ哲学者ドゥンス・スコトゥスの「存在の一義性」は、「神」も「石ころ（Ⅱ被造物）」も同じ概念「存在」で認識・表現できるというものである。現代の私たちにはごくあたり前に思えるこの考えは、中世神学にとって神への大いなる冒瀆であった。（不思議なことに「異端」のレッテルを貼られなかった。）

文字面を見れば、「一義性」「このものの性」は「同一性の哲学」の仲間のように思える。そうではないところに哲学（反哲学）の奥深さがある。

芳川泰久・堀千晶編『増補新版 ドゥルーズ・キウワード八九』（せりか書房、二〇一五年）の「二義性」「此性」の項に私なりの解釈を加えれば、次のようになる。

「存在の一義性」の反対概念である「存在の多義性」とは何なのか。「存在」という「類」に「犬」や「猫」といった「種」を割り振っていくとき（「類」は「種」の上位概念）、「犬の存在」と「猫の存在」は異なった「存在」と

して「存在の多義性」が出現する。しかしスピノザによれば、「神」Ⅱ「自然（宇宙）」Ⅱ「実体」Ⅱ「存在」であり、「犬」「猫」は「唯一の実体（存在）」が様々な形に分化した「様態」に過ぎない。これは、ハイデガー『存在と時間』の「存在」と「存在者」の区別、「未分化の生のエネルギー」Ⅱ「一義的な存在」が時間軸空間軸に現象（進化）していくベルクソン哲学と通底する。「一義的な存在」を分化以前の渾然一体とした老子的な「道（タオ）」になぞらえることができるかもしれない。

「このものの性（此性）」もドゥンス・スコトゥスの概念である。ドゥルーズは「このものの性」を確固たる形をもった対象ではなく、移ろいゆく一回きりの現象、例えば「夕暮れ」のような出来事を表現するときに用いる。

「ドゥルーズのいう「此性」は、捉えようとする意識をすつとかわすような軽やかな生成変化の単独性であり、それについては「ある」漂う何かとして語ることができるだけだからである。」（二八八―二八九頁）

四三年半の歩みは、ドゥルーズ哲学的な生成変化の連続ではなかったか。昨日までの「様態」は今日から新たな「様態」へと生成変化する。一抹の寂しさは否定できないが、新たなステージへの期待にワクワクしている。

本を作る側から (2)

村瀬 謙介

(小取舎)

ひよっとしたら今回より、定有堂のホームページから読んでいる方も多いのではないだろうか。

紙に印刷された文字はインクが乗っている。パソコンや携帯から読むテキストは、それが黒字の場合、光を発していない。当然のことながら黒という光はない。今のこの場合、文字の周りはRGB（レッド、グリーン、ブルー）による「光の三原色」が混ざり合い「白」が映し出されている。

デジタルカメラや映像を撮るデジカムにはホワイトバランスという機能が付いている。この地を照らす太陽の光源は、朝青く、夕方赤くなる。色温度が高いと青く、低いと赤くなる。これを自動的に、もしくは手動でその色を白だと設定してあげる機能がホワイトバランスだ。機械やフィルムは正確に天然の照明があたった被写体を切り取るので、例えば昔の映画に見るような地下道や自転車置き場のシーンでは蛍光灯の灯りは緑色に映ってしまう。これはフィルムカメラにホワイトバランスがないからで、白色の明かりにしたければ照明さんがライトに

耐熱のカラーフィルムを貼り、白い光になるように撮影する。

同じく人間の目はオートホワイトバランス機能が備わっている。その精度が高すぎるゆえ、本当の色を認識できていない。例を挙げるとすると天気の良い日の夕方に白い紙を見せて「これは何色？」と聞くと実際には夕陽があたりオレンジ色になっているにも関わらず「白」と認識してしまう。黒澤明の『椿三十郎』では襲撃する合図として白い椿と赤い椿が使われるのだが、実際には赤い椿は黒く塗って撮影された。本当の赤い花よりモノクロ映画では黒く塗った花の方が赤く見えるからである。

以前、鳥取大学で働いていた時、同じ部署の方が、白い壁を前にして学生の写真を撮る際に「背景は黒で統一しようと思うんですけど、プロジェクターに映す黒い画像を作って投影してくれませんか？」と言われ、困惑したことがある。黒い画像をプロジェクターで投影すると、もうそれは光を放っていない。というか黒を投影したところで後ろの壁が白である限り白なのである。人物のシルエットや黒猫を映したときもそれは黒く見えるだろうが白なのである。

人間の目と脳にバイアスがかかった状態（まさに色眼

鏡)は快適に生きる上で便利である反面、真実を都合よく歪めて見てしまうことがある。

恐ろしいのは、これが校正をする者にとって文章にまで及ぶことだ。

「背景は黒で統一しようと思うんですけど、プジロエタクーに映す黒い画像を作って投影してれくませんか?」というように文字の配列が所々入れ替わっていても、脳が補正をかけ、ある程度は読めてしまう。タイポグラフィ (Typoglycemia) と名付けられたこの現象は、誤字脱字を軽々しく見逃し易くするため、校正者はタイポグラフィセミアと戦うことになる。指でなぞったり、一字一句声に出して読んでみたり、日を変えて違う体調の時に読んだり。近親者の他の目を使って読んでもらったりもする。そしてなぜかプリントアウトしたもので確認する方が間違いに気付くことができる。しかしそれでも、誤った配列の文章は正しい文章に「擬態」する。ベストセラー小説の初版などでも「あつ」と思うものもある。

困ったことに戦うべき相手がタイポグラフィセミアだけではないことだ。文字の配列に間違いがないかだけではなく、ここにはルビ(読み仮名)があるかと、句読点や読点は抜けていないか、変な空白が字間に生まれていないかなどをチェック&修正しながら読まなければならない

い。他にも改行した頭が一字下げになっていなかったり、表現についてもわかり易く読める文章に変えたほうが良いのではないかという点もあり、様々な狡猾な敵を完全に成敗するには恐ろしく時間がかかる。集中力との戦いであるため、本の後半(というか原稿が入ってきた順が後半のもの)になると、より集中して目を凝らさないといけない。

もう一点、校閲というものがある。内容の整合性を正す作業だ。何年か前に校閲ガールというドラマもあった。校閲者は校閲を生業としてるので、ひとり出版の小取舎はととても踏み込めない。踏み込んだら最後、本を一冊出すのに一年が簡単に過ぎていってしまう。なので基本著者の方にほとんどと言っていいほど内容や文獻に關しての校閲はお任せしている。知り合いの印刷会社の方も校閲できる人が鳥取に少ないとおっしゃっていた。できることなら地方出版として鳥取の中の人たちで本作りを完結させたいが、そうはいっても何年、何十年も残る本を作るのに果たしてそれで良いのかということもしばしば考える。県外の校閲者に頼んでもよい。もし今後、小取舎でそういったことがいつかあれば、通常は完全裏方である校閲者の名前もスタッフロール(奥付)に記したいと思う。

汽水のほとりから (26)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

防衛費という名の軍事費が増えても反応しなくなった日本人。右傾化する人は、若者ではなく、中高年に多いという。ネトウヨという言葉もあるが、右傾化する中高年の特徴は、本を読んで歴史を勉強せず、ネット動画のみで知識を得ている点にあるらしい。その間違った認識の下、彼らは中国や朝鮮の人たちに差別的言動をとる。そこには戦争の記憶の忘却と反省の不徹底による戦後民主主義の末路があると作家の古谷経衡は警告する(『シニア右翼 日本の中高年はなぜ右傾化するのか』中公新書ラクレ)。

戦後民主主義とは何だったのか。その原点となる思想を語れる人があれば、これを未完で終わらせないためにも、今こそ発言してほしい。が、そうした人はもはや消えゆくばかりである。先日も戦後を代表する作家の大江健三郎が88歳で亡くなった。周知のように、彼はノーベル文学賞

を日本人として川端康成に次いで二人目に受けた人で、現地で行われた受賞記念講演「あいまいな日本の私」は、川端の「美しい日本の私」をもじったとして話題になった。が、私はその真意をこれまで考えてみたことがなかった。

大江は講演を英語で行なったが、「あいまいな」の訳は *ambiguous* である。批評家の柄谷行人は、大江との対談の中で、これについてこう語っている。僕自身が *ambiguous* をプラスの意味で学んだのは、ボーヴォワールがこの語の反対概念を *ambivalent* だといっていたからだ。*ambivalent* は対立的な二つの価値を一つに決めようとする状態だが、*ambiguous* は対立的な二つの価値が共存している状態で、学ぶべきは後者の両義性を認める態度にあると(『世界と日本と日本人 大江健三郎・柄谷行人 全対話』講談社)。

実際、『あいまいな日本の私』(岩波新書)所収の講演を読むと、「ポスト・モダンの日本の、国家としての、また日本人の現状も、両義性をはらんでいます」とあり、「あいまいな *ambiguous* が両義性の意味であると分かる。それは日本および日本人が持つ歴史的な両義性を認めることであり、川端が「美しい日本」だけを選び、「美しい日本」を排除したことへの批判になっている。思うに、このような両義性を認めた上で、それがもたらした痛みや傷からの治癒や回復を目指して再び起ち上がったところ

にこそ戦後民主主義の原点となる思想があったのである。

ところで、対立的な価値が共存する ambiguous な状態を
図に喩えれば、中心が二つあるいびつな楕円になる。が、
中心が一つしかない円の方を人はなぜか美しいと感じる。
戦前、評論家の花田清輝はそのことを批評し、「楕円幻想」
（『復興期の精神』講談社文芸文庫所収）を書いた。戦後
思想家の鶴見俊輔はこれを踏まえて、花田をこう評した。
「ここにはつきりと花田の理想はあらわれている。戦争中
に彼が、元マルクス主義者をふくめての、国粹主義陣営の
真円主義者を相手として抵抗することを余儀なくされたよ
うに、戦後の彼は左翼陣営内の真円主義者と論争せざるを
得なくなった」（『花田清輝の戦後』黒川創編『思想をつ
むぐ人たち 鶴見俊輔コレクション』河出文庫所収）。

鶴見のいう「真円主義者」とは、国旗の日の丸のごとき
円のような、美しい理想を主義として掲げる人のことだ。
そうした人は右翼的な「国粹主義陣営」にも、「左翼陣営」
にもいた。右と左の違いはあれ、花田にとつて両者は同じ
穴のムジナだった。花田の理想は楕円である。そう鶴見は
言う。それは大江の言う「あいまいな日本と私」のように、
ambiguous を肯定する理想である。が、戦後七十年以上を
経て、我々はそうした理想があったことを忘れつつある。
冒頭に述べた右傾化する中高年は「真円主義者」だろう。

彼らは「円の亡霊に憑かれている」（「楕円幻想」）の
だ。

シンガーソングライターの寺尾紗穂は、岩井温泉にある
尾崎翠資料館を訪れた際に、尾崎翠フオーラムの仕掛け人
土井淑平を知り、彼から『尾崎翠と花田清輝 ユーモアの
精神とパロディの論理』（北斗出版）を贈られる。彼女は
この土井の本から花田のことを知り、「楕円の夢」という
曲を書き、こう歌った。「私の話を聞きたいの／ほんとと
どちらか聞きたいの／どちらもほんとのことなんだ／そん
な曖昧を生きてきた／明るい道と暗い道／おんなじひとつ
の道だった／あなたが教えてくれたんだ／そんな曖昧がす
べてだと／明るい道と暗い道／狭間の小道を進むんだ／あ
なたが教えてくれたのは／楕円の夜の美しさ」。

「楕円」をテーマに唄い、「曖昧」の語が出てくるのは
偶然ではあるまい。心に愛と憎しみが共存するように、
人の人生にも国の歴史にも両義性を認めるべきだ。大切な
のは、それがもたらす痛みや傷を引き受ける覚悟である。
「あいまいな日本の私」の真意はそこにある。両義性を
認める態度はユーモアも生む。それは知性の顕れである。
「真円主義者」の硬直した差別的言動は、その対極にある。

本屋の中をぶらぶら歩く

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

かつて新しい生き方を模索していた年下の友人に、定有堂書店の中で本を探してぶらぶら歩くことを勧めた。奈良店主と対話しながら、何かきっかけになる本を探すのである。その結果、彼は「小屋暮らし」の本と「間借りカレー(飲食店)」の本に巡り合い、豊かな人生を送るために「週二回、カレー屋を自宅で開く」という少々変わった副業を見つけた。



芥川龍之介ではないが最近、「将来に対する唯ぼんやりした不安」を感じている。もちろん、不穏な台湾海峡とか年金破綻といった「今そこにある不安」もなくはないが、それ以上に唯ぼんやりとした、つかみどころのない不安、全ての価値がひっくり返る端緒。そのようなものを実は「来るべきAI(人工知能)社会」に感じている。

日本政府のデジタル化推進はまことに粗末なもので、

これまで多くの国民が迷惑と混乱をこうむってきた。

私の例だけ挙げて、コロナワクチン接種証明やマイナポイントのアプリは、「お使いのデバイスはこのバージョンに対応していません」と跳ね返された。鳴り物入りの「e-tax」は複雑怪奇で、ようやく青色申告したものの、3カ月も経って封書で「不備があるので追徴金をいただきます」と来た。ならば申告時にちゃんと指摘しろよ。

とまあ、散々である。国民が等しく利用し、共有すべき必須のシステムなのに不備だらけ。「世界のデジタル化に乗り遅れるな」と叫ぶ割にはどこか腰が据わっていない。



そんなトホホな日本が今、直面しているのが、たぶん人々がAIと初めて本格的に相對することになる「チャットGPT」の導入。何でも即座に応え、望む文章を作ってくれるこのAIは、はたして天使なのか悪魔なのか。

ある番組で学者がチャットGPTを「何でもスラスラ応えてくれる、やたら調子のいいヤツ」と例えていたのには笑った。「へたをすると詐欺師。まあ、話し相手ぐらいに考えてくれれば」と言うのである。そう、この「調子のいいヤツ」は機械だから、回答によって生じたトラブルの責任までは取ってくれない。取るのは使った人間の側だ。

平井伸治知事は「県庁の公文書作成はチャットGPT

より、ちゃんと地道（ジミミナー）に」と得意の駄じゃれで導入を見送ったが、職員の少ない自治体では「雑事から解放され、住民対応など本来の仕事ができる」と導入を検討中。この見解にも一理あるが、人員や仕事の見直しでも改善はできる。チャットGPTへの対応はこの小さな鳥取県内でもバラバラだ。

◇ ◇ ◇

以前もこの欄に書いたが（音信不通70号「てもちぶたさ」か「てもちぶさた」か）、漫画界の巨匠、手塚治虫は今から半世紀以上も前にAIが社会をコントロールする作品を描いている（火の鳥・未来編1968年）。

人類は政治、経済のすべてを全知全能のAIの判断にゆだねて地下都市で暮らしている。やがて「マザー」と呼ばれる各国のAIは「私こそ正しい」と対立し、互いに核ミサイルを撃ち合つて人類は滅ぶ。手塚が天才的なのは、AIの管理下で、人々はファクションや芸能、グルメにしか興味を示さない無気力な暮らしを送っている、と予測していることだ。「自分たちの頭で考え、状況を切り開く」というホモサピエンス誕生以来の能力を失った人類の末路。私たちも、そこに一歩ずつ近づいていないか。

アーサー・C・クラークは「2001年宇宙の旅」で、AIが反乱を起こした宇宙船を人間が再び取り戻すことで、

人類の新しい進化（機械文明に対する超克）を象徴的に描いた。アシモフは「ロボットは人間に危害を加えてはならない、人間の命令に服従しなければならない」とするロボット三原則でAIの暴走を規制した。

ところが、かつて手塚治虫やSF界の巨匠らが発した警告は、ほとんど省みられていない。大型の軍事ロボット、AI搭載の攻撃型ドローンなどSFの世界のものであった兵器は、すでに実用化されている。

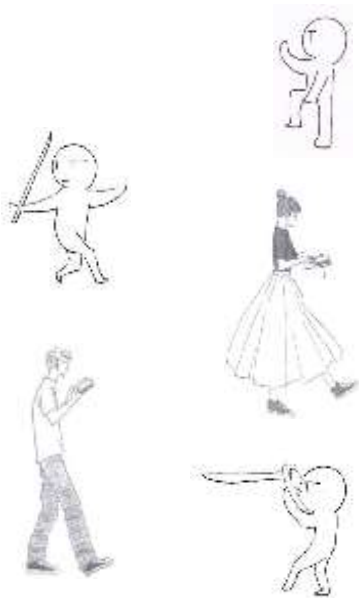
◇ ◇ ◇

冒頭の話に戻るが、「便利だから」と無定見にAIを取り込む未来は、危険性を孕んでいる。私たちは分からないことがあるとすぐスマホに手を伸ばし、検索する。スマホ依存症だ。その検索をAIは解析し、ネットで「あなたが欲しいのはこれ」と勝手に商品を勧めてくる。

AIがおぜん立てしたお仕着せの世界に生きるのか、それとも、本との出会いという「偶然の中にある必然」（ユング）を選ぶのか。幸福な出会いの場合（定有堂書店）を失った喪失感を、私たちはやがてじわじわと感じるのかも知れない。

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示



定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師) 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)



太極拳教室(会場 定有堂二階) 葉香クラブ(荷葉)

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

定有堂教室 「読書室ヒオトープ」

小説を読む会です

第一回テキスト『星の王子さま』

惜 春 賦

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

昭和五十年代、それは出版界も書店業界も元気が良かった時代である。若者の活字離れは、既に慢性化していたけれども、それでもまだ、活字（本）に対する信仰に近い感情は残っていた。

日本中で流通している全ての本を集めると豪語した八重洲ブックセンターのオープンが五十三年。三省堂書店神保町本店の新装開店が五十六年。大型書店の出店が全国に広まっていく嚆矢だ。鳥取に、紀伊国屋書店の出店計画が持ち上がったのも、この頃だった。

日本の年間出版物の総点数が三万点を超え、ニュースになったのが五十七年である。

当時、鳥取市内には、二十軒近い書店があった。（人口に比して）喫茶店と書店が多いのが、この町の特色だった。書店の大半は、家族経営の中小規模店であった。

そんな最中の五十五年にひとつの書店が開店した。ほと

んど目立たない、町の小さな本屋さんであった。同じような規模の本屋ばかり増えてもなあ、というのが「本好き」を自認（僭称）する一読者の正直な感想であった。

そして、星降り年経て四十三年、この間、市内の書店は、櫛の歯が抜けるように、一軒減り、二軒減り、気付いてみれば五指にも満たない数になった。

都市部の大規模書店にも翳りが見え、閉店や規模縮小が相次いでいる。現在建替え中の三省堂書店や、数年後に再開が予定されている八重洲ブックセンターも、恐らく、今までのようなフロア構成ではなくなっているだろう。本のデパート、といったコンセプトは最早過去のものである。

大手出版社は、コンテンツの電子化でしか利益を出せなくなっていくだろうし、中小零細出版社は取次を介した委託販売に見切りを付け、直販に傾斜していくだろう。隙間ビジネス的な、半ば同人出版のようなセミプロ出版社が増加し、商業ベースに馴染まないマイナー作家や、未訳の外国物などを武器に伸長していくことだろう。

活字メディアは、ここ二十年が正念場である。これを過ぎると、活字世代はほぼ死に絶える。まず、雑誌が姿を消し、相前後して新聞がそれに続くだろう。あとは、本が

どう生き延びるか、だ。

紙の本は生き残りはするだろう。しかし、それは、かつての民芸運動のように、モリスのケルムスコット・プレスのように、手工芸品化し、特定層のための高額なものになるだろう。庶民には、コピー製本のような簡便なものが提供され、両極化するだろう。

振り返って、出版界がこぞって大艦巨砲主義に傾斜していった五十年代に、手漕ぎボートで出帆した町の小さな本屋が行ったことは、身の丈に合った規模、品揃えの特化、コミュニティづくり、情報の発信であつた。グローバルではなく、ローカルで。

人は、所詮、自分の手が届く範囲、目の及ぶ範囲が限度である。起きて半畳、寝て一畳。何万冊もの本を一度に見せられても途方に暮れるだけだ。最近の読者は、本が選べない。指針を欲しがらる。決まった額を預けて、選書された本を送ってもらうタイプの本屋が人気だという。〇〇大賞や□□さんオススメが引つ張りだこなのも、そういうことだろう。マス・プロ、マス・セールのベストセラー幻想は、とうの昔に滅びた筈だが、寄らば大樹と形を変えて蘇った感じだ。

それは、コミュニティを欲する心情と軌を一にする。ビ

プリオ・バトルや読書会が盛んに行われるのも、何かを語り繋がりたい心理に他ならない。

一目で簡単に見渡せる店内に、自分のキャパシティに見合つた本がある。店主は人好きで、客に客を紹介し、人の輪ができる。寺子屋規模の小さな集まりを幾つも立ち上げ、場所を提供する。時には、それが持ち寄りパーティーになり、小旅行にもなる。客たちの発言や語りは、冊子やネットで発信され、形になり、新たな輪に繋がる。

周回遅れのトップ、と店主は語るが、いや、これはむしろ、フライングで一周先を走ってしまったというべきではないだろうか。

四月十八日の夜、シャッターを下ろした後、店の馴染み客が新旧取り混ぜて十人ばかり最後まで残って、思い出を語り合つた。お得意の寺子屋方式であつた。

店主に渡された花束は、オレンジ色のダリアが一際目を惹いた。

花言葉は「感謝」であつた。

鳥取あれこれ その八十一

内田 克彦（地域研究家）

二〇一九年に「婦選会館」に行ったときに、「新婦人協会創立100周年記念特別展『新婦人協会と全関西婦人連合会』」を開催しており、「全関西婦人連合会」なるものについての実態がよくわからなかった。

その後、二〇二〇年に、石月静恵・大阪女性史研究会編著『女性ネットワークの誕生 全関西婦人連合会の成立と活動』が出版された。

この著書から、鳥取県関係を抜き出してみる。

まず、一九一九年一月二四日、「婦人会関西連合大会発起人会」が朝日新聞本社で開催される。「発起人会出席代表者」の名簿には、「〈鳥取〉鳥取（小沢咲子・山田かめ子）」と記載されている。

同日に、「婦人会関西連合大会」が中之島公会堂で開催され、「趣旨・申合せ・付記」が決まった。それには、毎年一回以上大阪に連合大会を開くこと、各地方にては毎年一回以上地方大会を開き連合大会との連絡を計ること、大会事務所を大阪朝日新聞社に置くこ

と、が載っている。

そして、一九二〇年一〇月二五日、第二回婦人会関西連合大会が開催され、その配布資料には、「鳥取県連合婦人大会 1920/3/7 19 婦人団体 講演、音楽」とある。

このことについて、『鳥取県史 近代第四巻 社会篇』では、次の記述があるものの、当時の県連合婦人会の活動状況についての記述はなかった。

鳥取県でも大正九（一九二〇）年、朝日新聞の肝いりで、地域婦人会のほかの諸団体も加わり、県連合婦人会を結成し、以後毎年、県大会を開き、また島根県と共催で、山陰連合婦人大会を開くほか、関西連合婦人大会にも代表を派遣するのを例としてきた。

その後、一九二四（大正一三）年二月創刊の、全関西婦人連合会発行の会報（機関誌）が『復刻版 婦人』として、一九九六年に不二出版から復刻されているのを知った。県立図書館所蔵の復刻本をあたると、一九二五年七月号の「各地婦人会消息」に「鳥取県連合婦人大会」が載っていた。

本社鳥取通信部後援の第四回鳥取県連合婦人大会は六月二十六日地久節〔皇后の誕生日を祝う日〕の佳き日に鳥取県立高等女学校に開催された。夜来の雨名残りなく晴れて久松山の緑いや濃き日であつた。

まず、午前一〇時から代表者会が開かれ、出席者は、知事夫人、検事正夫人、大佐夫人をはじめ「米子、倉吉その他県下各婦人会からの代表者五十余名」、司会は小沢さき、会長は白上知事夫人である。協議事項として、「勤儉奨励申合の件」「国定教科書編纂委員に婦人を加へられんことを本会より今秋開催の関西連合婦人大会へ問題として提案の件」「県下処女会を統一されんことをその筋に建議する件」「婦人に適當なる副業の件」「婦人修養機関たる婦人会未設置の地方に對しなるべく速に婦人会をせしめらるゝやう本会決議により県当局へ建議の件」が挙がっている。そして、午後一時半から大会を開き、その数「千名に達する大盛況」であつた。

一九二〇年が第一回開催であるので、この一九二五年大会が第四回であれば、毎年開催とはいえない。

『婦人』一九二五年一〇月号に載る「第七回全関西婦人連合会〔第五回大会で改称〕各地代表者名簿」には、「鳥取県 鳥取市 鳥取高女翠紅会（田寺とし子・北野よし子）愛国婦人会支部（浅沼けい子）篤志看護婦人会支部（田島しま子・西村ゆき子）母性会（多辻敏子）鳥取仏教婦人会（中村松子）鳥取婦人会（岡村都賀）松菊会（若林みね）郡部 八頭郡若桜婦人会（中尾順子）」とある。高女同窓会の二団体を除く、他の団体の活動状況は明らかではない。

因みに、『県史』には、資料出所は明示していないが、「昭和6年鳥取市における婦人団体」として、陸海軍将校婦人会鳥取支部、鳥取市産婆婦人会、鳥取仏教婦人会、鳥取聖神社敬愛婦人会、鳥取市基督教婦人会、鳥取市翠紅会が挙がっており、上記と重なる団体も見受けられる。

全関西婦人連合会が婦選請願を決定したのは、一九二五（大正一四）年一〇月二四日の第七回大会の代表者会のときである。翌日の大会には、市川房枝が「婦人運動のプログラム」と題して講演している。

（以下、続く）

二〇二三・四・二二

八代日記

(三十八)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店)

四月某日

世話になった北浦和の音楽居酒屋兼ライブ会場である「居酒屋ちどり」が、五月前半で閉まるとのこと。閉店に際し縁深い演奏者たちにて「ちどりジャンボリー」が開催されることになり、お誘いを受けたので二つ返事で浦和へゴー。

五月のライブの練習も兼ねたかったので、早朝に熊本を出て昼からスタジオに入る。今回はラップ曲の「座つてこぐ」の要所要所に四人でラップを被せることになっており、カンペを見ながらラップの練習。改めて歌詞を読んだら、これは傑作では？自分のラップは下手だった…。ちどりにハドラムセットがないのでローランドのSD-SXのみでの演奏。本番はなかなかいい感じだった。

共演の甲斐哲郎さんの演奏が素晴らしかった。皆さんもぜひYouTubeなどで聴かれてみてください。

ちどりは道路と入り口の距離も短いし(往来・路上・ストリート)、出演者込みで三十人くらいしか入らないしス

テージもないけれど、その感じで演奏するのがお客さんの様子がダイレクトにわかっていちばん楽しい。奈良さんの言われる書店と本屋の違いと似ている気がします。

四月某日

定有堂が閉まると知る。が、伺えなかった。定有堂には一度行つたきりで奈良さん、編集長にも一度お会いしただけ。数年前に入店して、舞い上がった気分のまま、あの場所もお二人も半ばファンタジーの中のような。

軽くくだを巻く俺のマイクログフォン次第に汗は飛び散りミストのように溢れ出す俺の愛と唾浴び 果てる間際の声で叫べケバジョンケバジョンてばねえケバジョン何？響きはすでに諸行無常

夜明け前に漕ぎ出すペダルのように

不安と期待の眼差しを背に

サドルは高めハンドルは低め

弱り目祟り目辺りの目避け

何気に足蹴にされた日々の音

呼び覚まそう 思い起こそうぜ
あなたのそばに潜む黒い影

ケバブジョンソン 依然逃走中

座ってこぐ

やがて和を乱す俺のマイクログフォン
時空はすではみ出しあちらの方へ
溢れ出す俺の愛と唾

阿鼻叫喚のブラックホールに吞まれ
消えるか果てるかまたも吐き出すか
答えは風に舞い続けるか

夜空を照らす大いなる銀河
握るパドル力込め辿る

さあこぎだそう音の海原へ
風を忘れた奴らの元へ

煤けたファンクに身を焦がす
耳元で囁くのは恋のブルーズ

なんだかんだしたあとは布団でグースカ
うねりだす夢の扉ノックして80ってか

旅路の後に見る夢も旅

ケバブジョンソン以前暴走中

座ってこぐ

そしてオーラス物語もついにラスト

遠い目をして思いを巡らす

K・E to da B・A・B 思えば遠くへ got to be

はた迷惑なこの騒ぎに蠢く幾多の記憶はちとほろ苦く

甘い香りと極上のコク

よくよく見てみりやその色深く

白濁の悪魔に乗り込み行き着く先はそう神頼み

あるいは君が僕であったのに終わらないDNAのハーモニー

行くぞ行くぞの大合唱

若造に姉御みなご一緒

「パライソさ行くだよね？ 船長」

もうしのごの言わずに黙ってこぐ！

座ってこぐ

座ってこぐ

座ってこぐ

座ってこぐ

(ケバブジョンソン「座ってこぐ」作詞：杉浦真寛)

「差異」からはじまる

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

四月、新しい授業が始まった。高校二年生向けの学校設定科目で、英語科の教員と国語科の教員が指導にあたる。科目名は、『言葉と表現』。母語における言語表現と英語学習における言語表現をつなげることで、まさしく言葉に関わる力を身につける時間にしてもらいたいと考え、練られている。

最初の単元は、単語単位で、言語間の「差異」について見ていく内容とした。例えば、日本語の「こころ」は、「heart」と訳されることが多いが、これは感情を感じる場としての「こころ」しか表わせていない。風流心や「日本人の心」というときの「こころ」は「spirit」であろうし、「心に決める」というときは、「mind」とも訳せる。今回の授業では、英語のレンズを通して、日本語を見つめることで、「こころ」の意味の広さを深掘った。

きっかけは、この授業を作る中で参考にしていった『こころの教育を問いなおす』（2019年）に、「こころ

の英訳がたさが指摘されていたことだった。

朝日新聞に掲載された宗教学者・山折哲雄氏の連載で、「英語でいうと ハート／スピリット／マインド／ソウルなど、さまざまな表記がそれにあたりそうであるが、どれひとつびつたりとくるものがない。ぜんぶひつくるめてもしっくりくるようにはとても思えない……。」

(二〇一九年一月十五日号)

と書かれた記事を読んだ苅谷夏子氏は、

「このエッセイを読んでから、私は「こころ」という語に出会った。ちよつと立ち止まり、英語に訳すことを試みてみますが、その試み自体が私の理解を助けたり、発想を広げたりするのを実感します。」

と述べている。あえて英語を通して考えることで、身近な概念に新たな視点が加わり、どんな言葉なのか見つめる機会を得る。この箇所をもとに全五コマの授業を作った。

「英語を通して日本語を見る」ということは、英語科の教員にとっては、身近な行為だ。「この日本語を英語に訳すなら?」「この英単語の日本語の意味は?」と日常的に考えるし、生徒たちからは、生き字引のように、「これなんて言いますか?」と聞かれてしまう。しかし、実際にはびつたりした訳を見つけることは難しい。Google 翻訳

ですら、複数の訳を提示してくる。その中で文脈にあった適切な意味を選び取る力、あるいは自分の表したいことに繊細に向き合う力は、この本の中でも指摘されているように、「ことばの〇」のような基盤の力かもしれない。それは母語である日本語で基盤を鍛え、英語を学ぶ際にも役立てられる。そして、日本語と英語、二つの言語を少なくとも義務教育で学ぶ日本では、その言語の「差異」を意識し、扱っていく機会があふれているはずなのだ。

（実際の学校には、日本語が第二言語という生徒がいることも留保しなければならない。）

と、この「差異」というキーワード。今の私には、別の意味でも馴染み深いものになっている。

去年から始まった定有堂のドウルーズの勉強会のため、訳もわからず、ドウルーズを読む日々を過ごしている。そんなドウルーズ哲学のキーワードが「差異」である。私はその主著書である『差異と反復』を読むには至っていないが、そのドウルーズの考えを紹介している千葉雅也氏の『現代思想入門』（2022年）には、「世界は差異でできている」というのが彼の世界観であると書かれている。

「そもそもA、Bという同一性よりも手前においてさまざまな方向に多種多様なシーソーが揺れ動いている、とで

も言うか、いたるところにバランスの変動がある、という微細で多様なダイナミズムのことを差異と読んでいます。（略）

一方、同一的だと思われるものは、永遠不変にひとつに固まっているのではなく、諸関係の中で一時的にそのかたちをとっている、という捉え方になります。」

これはまさしく、翻訳や和訳・英訳の営みにつながることはないだろうか。

最初、我々は同一性、同じ意味を持つ言葉が、それぞれの言語にあるかのごとく秩序立って学んでいくが、実際は「差異」にあふれている。そこを文脈であったり、自分の親しみのある母語との関係であったりを通して、その言葉の「かたち」をとらえていく。「一時的にそのかたち」であると捉えることで、理解に踏み出し、表現につなげることができる一方で、受験やテストを通して、その「かたち」が絶対的なものであるように錯覚する。本当は「差異」から始まっているのに、いかに「逃走線」を引くか。

私自身はドウルーズの勉強会に参加しながら、毎回悪戦苦闘している。が、もしかすると、具体レベルではドウルーズ的なものに大いに魅了されているのかも知れない。（と思ったのですが、いかがでしょうか。）

飛ぶ

あきの素生

(くうねるめがね)



アレルギーの検査で、反応があったためしがない。主だったアレルギー物質によるアレルギーはないということなのだ、今年の花粉と黄砂には、さすがにまぶたが少し腫れたり、顔や体のあちこちがかゆくなったりした。マスクのおかげで、この程度で済んでいるところもあるかもしれない。毎日マスクを着けるなんて冗談だろう、と思っていたものだが、くしゃみが出ることも、風邪を引くこともなくなり、ちょっとした外出ならマスクで事足りる。今ではマスクを外すことに抵抗を覚えるほどだ。洗いすぎてかびかびになっていた手は消毒されることに慣れたのか、こまめに手洗い消毒をしていても、洗浄力の強い洗剤を手袋無しで使い続けても、湿疹が出なくなつた。それはさておき、アレルギーは突然発症すると言うから、もしかしたらと思いつつ、まだ大丈夫と自分に言い聞かせて、低刺激性の日焼け止めを塗っている。

年がら年中、いろんなものが飛んでくる。遠くからも近くからも。

洗濯物を干す前に、お天気アプリで花粉 黄砂、PM2.5の飛散状況を確認するようになった。陽に当てたシーツやタオルの匂いが好きだったのだが、滅多に嗅げなくなつてしまった。どうしても紺色がいい、と選んだ愛車には、砂の色がよく映える。洗車にしても数日後にはまた砂まみれになって、こつくりとした紺色をくすませている。ひょんなことから乗らなくなつてしまった自転車が、駐輪場でどンドン錆びていつているのは、海風の運ぶ塩分のなせるわざだろう(自分の不精はさておき)。

もちろん、悪いものばかりじゃない。つい先日、ぽつかり空いた時間に晴れた空をぼんやり見上げていたら、あげは蝶がひらひらと飛んできた。風が強く肌寒い日だったが、束の間のどかな春を感じさせてくれた。桜の花びらや、たんぽぽの綿毛なんかもいい。

飛来物や漂着物には憧れもある。子どもの頃は、風船や小瓶で見知らぬ誰かからの手紙が届いたらいいのにと夢見ていた。『ぶどう酒の瓶に入った手紙から物語が始まる』ぐりとぐらのかいすいよく』が好きで、何度も繰り返し読

んだ。予期せぬものと、まだ見ぬもの。小さな体ひとつではたどり着くことのできない、遠くに存在しているらしい人や場所に思いを馳せた。

大きくなるにつれて行動範囲が広がり、飛行機で空を飛んでいくことだってできるようになった。初めて飛行機に乗ったときは、白くもくもくと広がる雲を眼下に、濃い青の空がどこまでも水平に続く光景を飽きることなく見つめ、何枚も写真を撮った。

泳ぐことはできても飛ぶことはできない。海の深さは、自分には本やテレビ、インターネットでしか知りえないものだが、空の果てしなさには日々接している。飛ぶことにより強く惹かれるのには、そんな理由もあるのだろう。

ハンググライダーやパラグライダーに乗ってみたいという気持ちは、十代の頃からあった。飛ぶことを肌で感じてみたかった。にもかかわらず、忙しさやタイミングの合わなさを理由に、飛ばないまま今に至る。生身の体を宙に晒して飛ぶことは、やっぱり怖い、という気持ちもあるように思う。

通っていた高校のグラウンドに、パラグライダーが不時着したことがあった。といっても、休みだか放課後だかで、私は直接見ていない。級友によれば、いくつかの部が練習

しているところに、その人は降り立ったのだという。サラーイマンで、怪我はなく、状況を説明してきつと立ち去った、という話だったと記憶している。小学生の頃好きだった「メアリー・ポピンズ」が重なって想像が膨らみ、自分が見たわけでもないのに、思い出すだけで胸躍るできごとになっている。

メアリー・ポピンズと言えば、風の強い海辺で、もしかしたら飛べやしないかと、ビーチパラソルを広げて両手で捧げ持ち、ぴよんぴよん飛び跳ねてみたこともあったが、数歩よろめいて転びそうになるのが関の山で、飛ぶことはできなかった。もちろん子ども頃の話である。



眉雲の野望



ドラメリア (座敷わらし)

「ありがとうございます!」

元氣よく礼を言っ去る生徒の、去り際のさわやかな笑顔。あ、いい笑顔。とまず思い、どうしてこんなに印象に残ったのだろうと考えて、そうかマスクをしていなかったからだと遅れて気づく。コロナから四度目の春が来て、ようやく生徒達の素顔を見られるようになった(とは言っても、大半の生徒はまだ着けているが)。

自宅以外ほぼマスクの生活になってから、顔の上半分を意識的にオーバーに動かすようになった。元来表情が乏しく「おまえは能面のような無表情をさせたら学年一だな!」と教師に誉められたこともあるぐらいだが、対人(ひと)のサービスをやっている以上能面のままでいるわけにもいかない。笑顔を作るときは目も眉も隠れた口元も総動員して、全力で「笑っています!」という雰囲気を作る。驚いたときは思い切りよく眉を上げ、悲しいときはぎゅつとしめる。素顔でここまで大げさに喜怒哀楽を表現することはまずないので、意識としてはほとんど「顔芸」に近い。

顔芸、といえは実はわたしは「眉芸」が得意で、片眉だけの上げ下げも自在にできる。これはその昔米国のSFDドラマに夢中だった頃身に付けた技術だ。主要登場人物の一人である異星人が興味をそそられたときに片眉を上げる仕草をしていて、それを鏡の前で真似ているうちにできるようになった。

もつとも能面人間としては日常生活での出番はほぼなく、これまた訓練して習得した「バルカン・サリユート」とともに封印しているもののひとつだ。いつか彼の口癖“Fascinating”とともに披露してみたい。というひそかな野望がある。



・編集後記

「傀儡政権」という言葉をこのひと月に何度も口にする機会があり、(自分のことなのですが) なんだか大変面白かったです。

ドラメリア (編集長)

ドラメリアさんが「定有堂教室」の案内サイトを作りました。右のQRコードを参照ください。「本屋の守護神」と敬愛する石橋毅史さんに寄稿いただきました。奈良敏行(発行人)